

砂漠と水と生命

——マリ共和国地下水開発——

いのち

文部省選定
教育映画祭優秀作品賞
海外取材
シリーズ



科学技術映画祭 長官賞
日本産業映画ビデオコンクール・日本産業映画ビデオ賞

●——すいせんの言葉

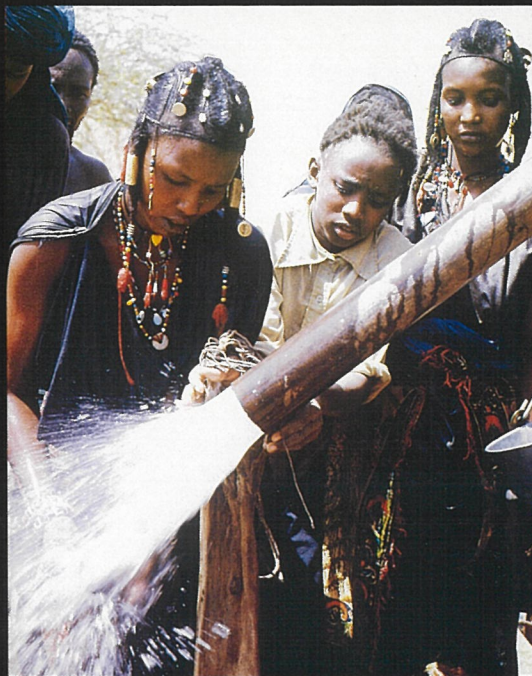
マリ共和国は、1960(昭和35)年9月22日に独立した。未だ若い国であります。11世紀後半から16世紀末期まで、即ち、1590年のモロッコの侵入まで、マリ帝国として栄え、その伝統は、今なお、イスラム文化により、連綿と継承され、トムブクトゥ(Tombouctou)他、国内の各地に往時を偲ばせる「遺跡」をみることが出来ます。

ただ、サハラ砂漠のとどまることない南下現象と周期的な旱魃の襲来は、マリ国の国家運営全般に、深刻な影を落し続けており、このたびの日本政府の《地下水開発》に対する、資金・技術協力は、マリ国にとって、正に、《命の水 = eau de la vie》そのものであります。

今回の事業は、私が、本国から、ケイタ(Keita)工業・資源開発大臣閣下が、来日された折、名誉領事引受け方の要請をうけ、その後、昭和53(1978)年、日・マ両国元首より、正式辞令を拝命して以来、「一番の慶び」と存じます。

この映画を広く、日本国内に紹介されることは、マリ国にとっても誠に意義あることと考えます。終わりに、この映画が、物語る《事業》が、日・マ両国政府、並びに、両国民の「友好の絆」として、永く生き続けることを、祈念します。

マリ共和国在東京名誉領事
清川正二



●製作

株式会社 桜映画社

〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1
TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

●企画

国際協力事業団

●16ミリカラー・35分

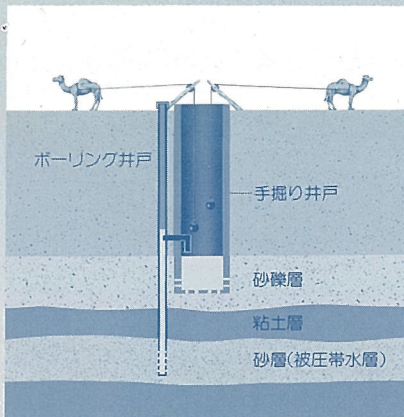
190,000円

●VTR 55,000円

●——すいせんの言葉

この映画は、日本とは全く異なる砂漠という自然の光景、その厳しい中での人々の生活など、まず、自然と文化の大きな相違を見せてくれる。また、井戸を掘って水を確保するための援助や協力が、どのように行なわれているのか。それが日本との友好関係を継続するには、どのような基本的な考え方に立つことが必要かが描かれている。中学校や高等学校の地理教材、国際理解、国際協力のための教材として適している。

全国高等学校海外教育研究協議会会長
東京都立桜町高等学校校長
板橋英一



【マリ共和国】—ロメモ

地理＝マリは全地域が熱帯地方に位置している内陸国。

歴史＝中世の頃は、広大なマリ帝国として、大西洋から遙かアルジェリアのアドラルまで権勢を誇り、豊かな文化的過去を持つ。

気候＝大きく3つに分けられ、5～10月が雨期で、この時期は暑くて湿度も高い。11～1月が冬で空気は乾燥し、2～4月は、乾燥する灼熱の季節である。

面積＝124万km²

首都＝バマコ

人口＝約716万人(81年)

言語＝公用語はフランス語で、アラビア語、ベルベル語も一部では通じる。

住民＝バンバラ族が最も多く、ほかにフラニ族、セメノ族、トゥアレグ族など。

宗教＝イスラム教65% 部族宗教30%

キリスト教5%

主産品＝落花生、綿花、砂糖キビ。

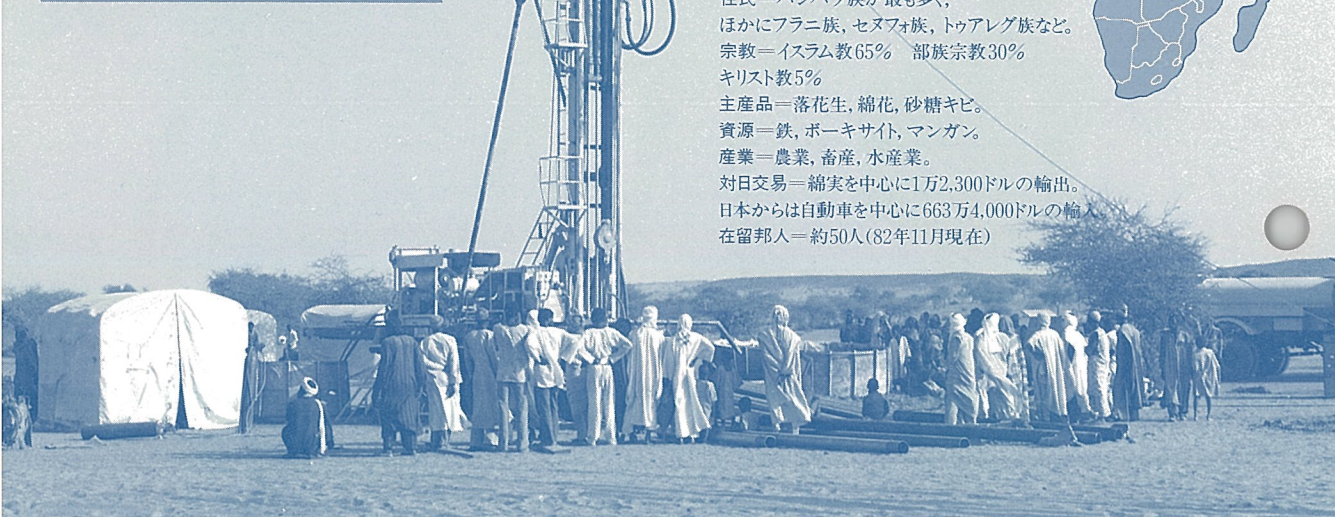
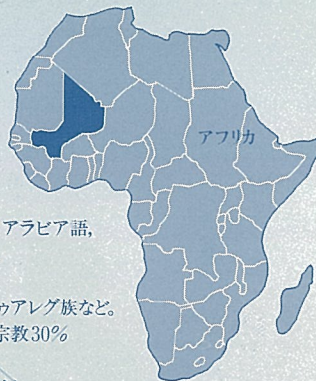
資源＝鉄、ボーキサイト、マンガン。

産業＝農業、畜産、水産業。

対日交易＝綿実を中心に1万2,300ドルの輸出。

日本からは自動車を中心に663万4,000ドルの輸入。

在留邦人＝約50人(82年11月現在)



●——あらすじ

マリ共和国は、アフリカのサハラ砂漠の南西にある。この国の大半を占めるサヘルと呼ばれる乾燥地帯——そこでは牧畜が唯一の産業である。そして人々は、乾期にも旱魃にも涸れない井戸を待ち望んでいた。

映画はまず褐色の大地——マリの砂漠の光景から始まる。雨期には川幅100キロメートルといわれるニジェール川も、乾期に入ると動物が歩いて渡れるくらいになる。そうなると人口の大半を占める遊牧民に欠かせない水は、井戸水、地下水だけということになる。

しかし、10年前の大旱魃のときは、深さ30～50メートル位までの井戸は、すべて涸れてしまった。砂漠になった草原には牛や羊の白骨が風に吹かれている。

マリ政府は、深さ100メートル程度の本格的な深井戸の建設を国家開発計画の優先重要項目とし、日本にその協力要請を行った。この調査地区には、過去に50本もの井戸が外国の援助によって掘られている。しかし、現在も生きて使われているのは3本のみという。他はすべて壊れているのである。何故ダメになるか。どんな素晴らしい援助でも、現地の人々がそれを使いこなし、維持管理していく体制がなければ残骸になる。人々の生活に直結し、自立・発展を促す技術協力とは何か？ 映画は問いかける。

●——スタッフ

製作＝村山英世 撮影＝北川英雄 録音＝伊藤 亨
脚本＝花崎 哲 撮影助手＝山屋恵司 解説＝山本 學
演出＝村山正実 音楽＝長沢勝俊

●——解説

近年、国際協力のあり方をめぐって新たな関心が集まっている。開発途上国に対してともすれば、ものの供与だけになりがちな「援助」への反省から、どのようにすれば技術がその国に根づき、人々に喜ばれる生きた協力ができるかが模索されている。

この映画は、そうした望ましい国際協力を実現しようと、試行錯誤をくり返しながら進められてきたアフリカのマリ共和国の地下水開発調査の活動の姿を、遊牧民の生活や人々とのふれあいをまじえながら興味深く描いていく。

共に国際社会を生きる人間どうしとして、そのつながりはどうあるべきかを、調査団の人達とともに考えようとした作品である。

●——映画の利用方法

《対象と関連単元》

- 中学＝社会・公民(国際社会と日本——国際政治の課題)
社会・地理(乾燥地帯の人々と生活——水と農牧業)
- 高校＝現代社会(国際平和と人類の福祉)(文化と環境、文化の交流——文化の普遍化と相互理解)
地理(世界の諸地域——発展途上諸国)(世界と日本——国際協力)
- 一般＝公民館、公共施設等での映画会
青年・成人学級 婦人学級

《利用方法》

- 地域・民族固有の文化、生活を知り、人々がかかえている現在の問題点を理解するとともに、国際協力のあるべき姿について考える一材料とする。
- 特別活動や地域の映画会で活用し、広く国際的な問題に眼を向けるきっかけとする。

海外取材シリーズ(桜映画社作品)

- | | |
|-------------------------|------------------|
| ① インドネシアの母たち(インドネシア) | ⑤ カティワラ(フィリピン) |
| ② スマトラ物語(インドネシア) | ⑥ アメナ(パングラデシュ) |
| ③ 村に生きるスラベシ島の人々(インドネシア) | ⑦ 菩提樹の下で(スリランカ) |
| ④ カラモアンわが村(フィリピン) | ⑧ カサ デ サルー(メキシコ) |